

思の出の儘の

本間文庫
文庫 14
A 145

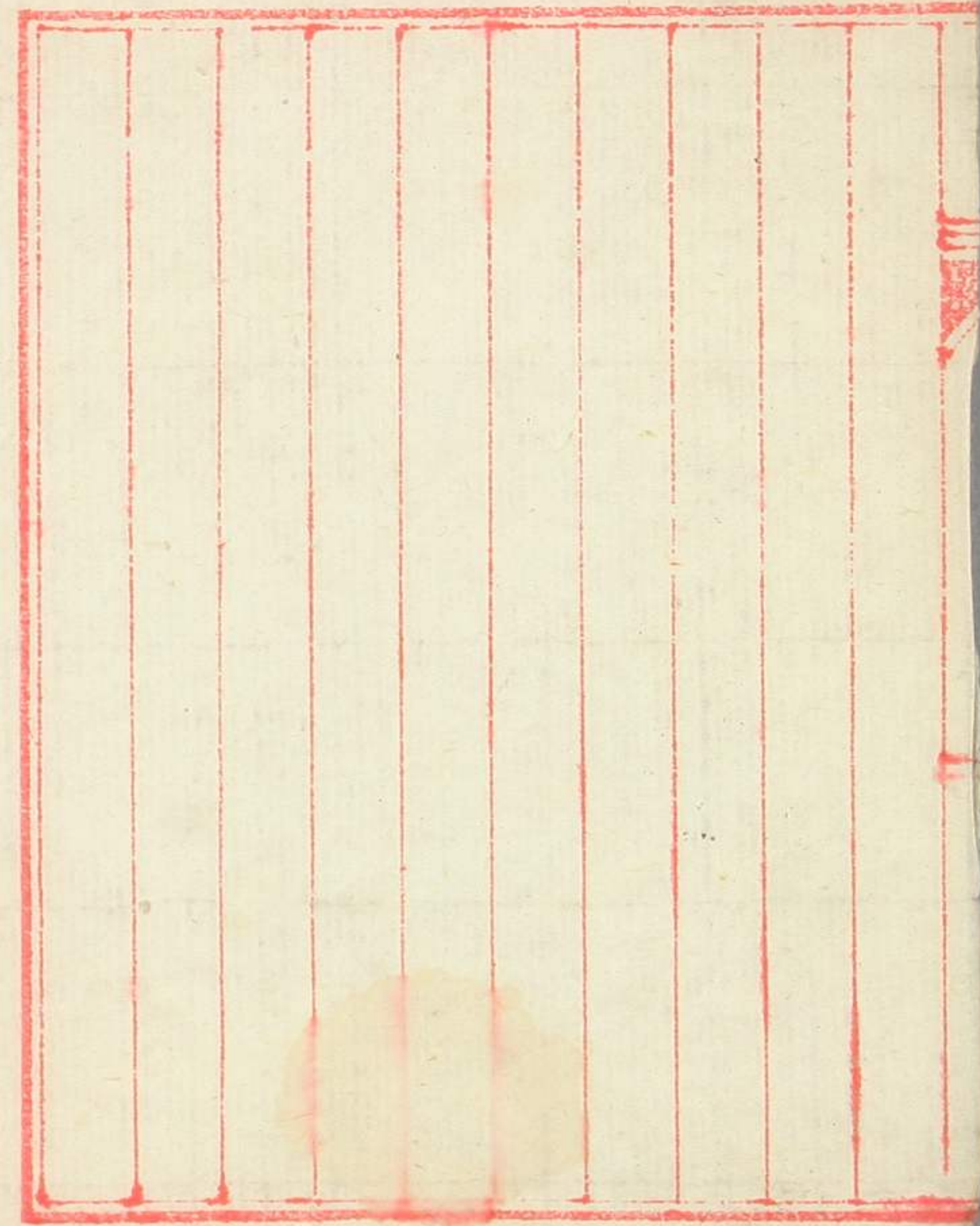


文庫14
A145



旅千古藤登 百飄々として
 秋山房小半 秋胸中三石の熱淚乾
 滅つて吾と 尾稚き語方こそましく窓下
 結成抱ひて 眺め月よりおのづか食あり
 其調凄絶 主客を思はぬ 結成異し悲藤
 登時あり 筆取らんと 撫む心志吾
 きん今宵を哀まふはをるる小打きこ
 ぬきて曰ふ

月小泣く調の長深志と
 心小奏つる悲愴の曲小優めや



哀きこととて泣く術知らぬ人はいづき
万石の暗涙 涙ど人いふ

述懐

月小鳴き花小咲らん時鳥

春風吹花

咲く花枝いとびすけぬ吹散らす
風の心お人問はるるを花入ん。
塵の音も長之墨のいと情おける

三子ぐの首お受けを

四月十音

佃氏の雷お響のいそ

若石白鳥のまも下あ
一律

| | | |
|-------|-------|--------|
| 共所へ来ぬ | 優き者や | 共所へ来ぬ |
| 真珠のぬき | 銀色の | 習書と書きて |
| 指べのいし | 形きのおほ | 共所へ来ぬ |
| 縁ふふは | 見ゆる形 | 汝が顔は |
| 羨しき | まきのぞき | 汝が眼は |

光るふは 金剛石 優りぬを
わらめあえ 鏡の如く 賦なきぞのい

四月十日 田所氏の寓の歌書と續之

景梅の歌あり

猿の藤ふあゝのさくらを見ても

引とめて止まる 春とや思ふらん
げ小人よりはあゝ好むけり
げや玉地のまは心ぬき禽獸とも
初めしとて花を惜み春由立行

とせみ鳥人あゝ思ふはまのけりまは引
けば止らんを 鳥のよまのわらふあ
のしえ 號ぶは情のこぼれ下す
鳴時か昔人は散らで思ふ花行のぞ
る歌を思ふとは 知れぬらゝのさくら
をと惜む情の切なる 思ふえを
神の具ははく或は思ふのありとや思
ふむ

五月九日の夕 去るふ人懐いて

降雨ぞ魂うつす 春の真日

五月廿七 古きあやの魔の上を

懐ひて

いふ見し海舟の舟

花の舟

いふ馬の海舟の舟

花の舟

江戸橋の舟の舟

はや何時も春の舟の舟

去りて初夏の趣 前山緑梅の陰小宿
思ひの声ねく小増く夜の具の重き
思ひのなる 寂寞草屋の呻吟あは
都路の諸友を懐ひて 天外言あり 南の
之きと見まがひ 田舎友の面影 明系 然中
あし あるいは 未歸の心の奥に 三子ノズの姿
とこがねあは 都の聲中の 落花の花神
の面影をえのぶ ときや 諸子の 寺神の尊
前ハ 誠なる 教渡ののこみもの 座ろふ
うきしき けのふ けのふ けのふ けのふ

まきのぬの身にこそや東都の袂を別る
 よも今はこゝろをせたり人をよ。以来塵霧
 眼を蓋ふ姓雲の心を閉するもこゝろあ
 り。ひそこの小塵舟の月物外の花はこゝろ
 の人をも泣みて猶風塵の迷を脱する能
 はす。一度藤屋の顔にうけて心ぐし
 之京去のこゝろも今はまを雨びよのまぶる
 へりて日夜俗塵のこゝろまを塵舟にまを
 寄獨守るふ笑ふて書空のこゝろまを
 あり奥能慮とこゝろまをこゝろまを

高きと知らず。凡前の塵をぬの見え
 中の月をのみ月こゝろまをこゝろまを
 眼あつて益なり。只羨む可きは都路
 のまをこゝろまをこゝろまをこゝろまを
 今こそまや孤葉一瞬の真もたを都門
 小まよよひて畏友の神敷のこゝろまを
 禮を定可あり落花の思も定可して幼中
 花神の姿を忍ぶ人のまをこゝろまを
 隣み珍くや。麻履合は都路のこゝろまを
 此のこゝろまをこゝろまをこゝろまを

湯が小しし昔の夕、其の御座し下は稚の
 衣きき澄りしころみは物胸小き有へ
 やらそ、幼中、登裡小君の面敷を目入る
 古きあり、半次江古尔夢破らまじりて思を
 去来今小馳まる時澄然たる旅生の次め
 ありしころ昔眼小映ぶるもえはぐ
 ころの志、もはや去跡の山の奥深く西
 上人の昔ふんじりして、練り中ねま
 尾骨や此のよ
 此の子見えたる遊燕の

花と月

時止る舟なり、之を舟舟と請ふ情
 溢るる、重なるころ、紅辞を伝ふ、あわさ
 者、まよのあまるとまろをも多みね入れ
 申す

五月十日 時止る舟は未だ初音が漏るを

あま志をむし耳洗き聞え
 初音の形

五月十日 小倉若君と澄る歌よめと

あま志をむし

血小鳴るはねの音のみの
時鳥このの袖まほる

秋羊とむらぎや。

宵のものは月のみぬらじ

月とこぼれぬ。

五月まつ 園小蜀魂まきと

月花をちかみね花を

月とこぼれぬ。

雨のやみふ

飛くらむ。

五月おみ、横矢の滝を見そ

雪と花一度見たり滝の幸。

手家手家花を枕花もまきぬの夕の影。

○鏡河の上流瀬言ふあたるき

山川のよみ山白波を

花と身かけむ時鳥の影。

○黄鳥の声をきりぬけけまは

あるまの花歸りあつて黄鳥。

志とあはさの行方ぬけけ

○ 歸路ふきまを
百住の牛追ふてこの入る夕の船。

六月九日 某校の二年生某校の同級生

字のみの
女ら

迷つた
夢

今を
心

余
今

舟旅路ふ
ある

浪浪一万里
前ふあり

人の言
第一の

港ふ入る
もの

舟旅路の
な

よき船
舞

舟も
の

舟の形
ふ

二十日 前雨考

字の海の あらぬや

まよひの狭霧 決まらつゝ

今ぞ港の つきよける

ひとふ語を くらきけ

くは旅路の まよきば

やへの夕階 前ふあり

人々今ては たいちの

みねとふりし 物形をぞ

| | |
|---------|--------|
| 過ぎ志船路の | あゝの志まは |
| よき船人を | 鍛けむ |
| 帆も張り守を | のちもよし |
| やふさの志だふ | 浪もたふ |

七月二日

いづれをいふか

濁り江ふ

清さふ

七月五日

小倉君のぬゑに種をまきま

瘦菊、秋月

何るも母のよれにまのれ

因に秋あつしあつたの如

深き

月まじり秋うきつらじあつた

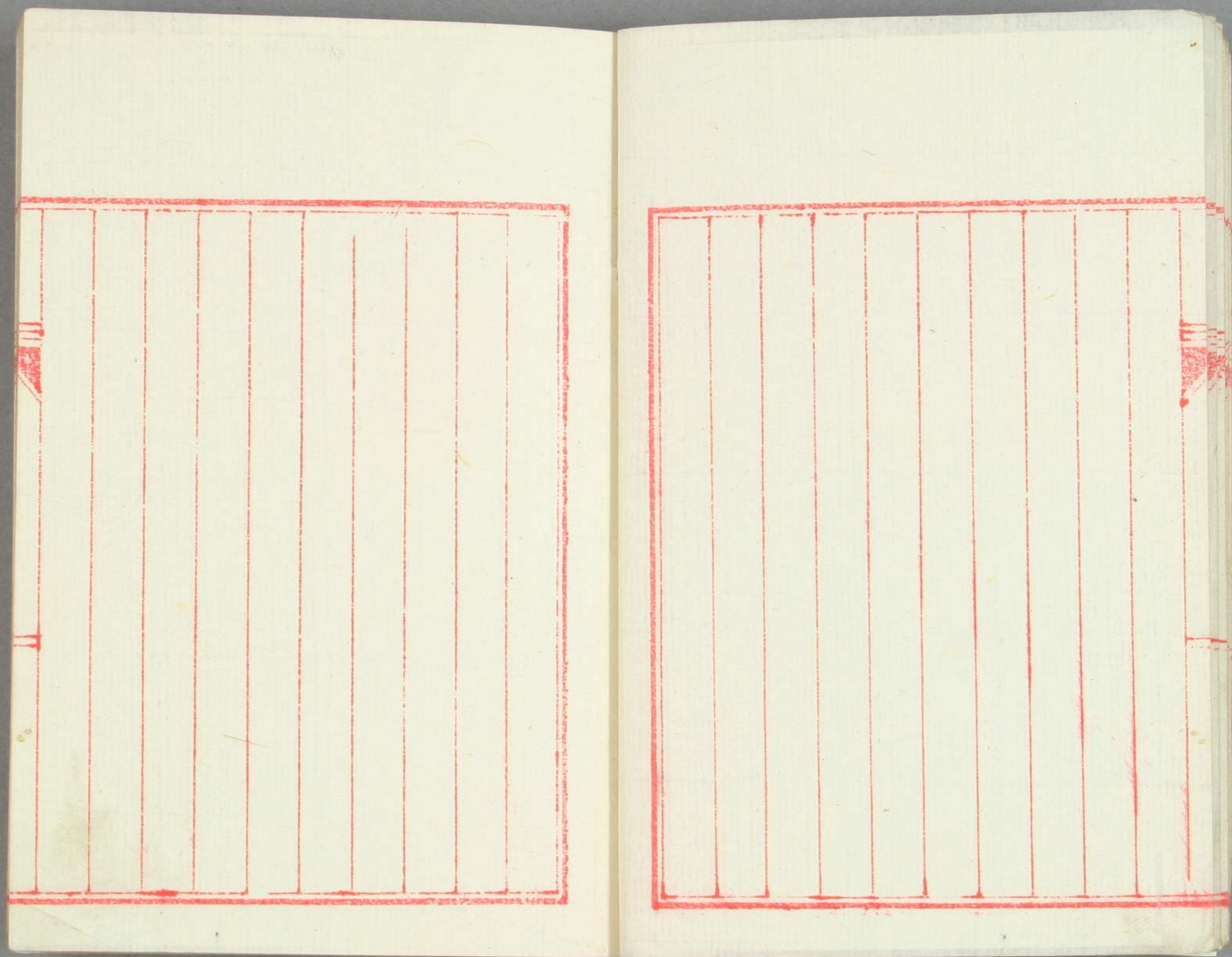
まじりあつた秋あつた

青々として

白干天の雲、壁かたよ

電光石火

七月



以下

3丁

白紙

八月廿五日晴

早稲田用戸之末を志らば函館
知友樓月正帯日二氏も方
と云出立の着更の衣親
三枚の集めて之を非
葉林集野里を添へ
之を三府を之れ久明神祠のほ
より車も清ひて驅する
の光景喧囂の状大田金漢の
新橋

たり 翠松白砂の曲浦を在り見
車は益々去りて家小國府津小寺
直ち不設道馬車不飛ひ入り
日光甚志きしり 章宛記清志
てちのくつこのをり 國府津の所は
胡ぶる用ひく 新築の家登中々
多し 酒匂の長橋を改造し申ける
小や中々小寺罷り 船上より海辺
を見やして 去る年 船をける車
子の上も 降ふ車小田 ~~田~~ 原小流

まは小田原より 鏡小字を求め
松壽園小歸り 志るまじ 田の出入
車中二三の整ふ夜あり 一人の整官
は他のひとより 髪をて 何とあらむ
殊むせらましたるのめし 杖をたて
他の他の 髪を夜も 干渉安更し
のた方も 非干渉安更し 青葉の
士のせも 志みも 終らば 面白らむ
どの例の 風花 子このまじ 打込
か怒小田原あり 車は例の道也

去り早川流もたふして佳む
後早くと雨かけをそやあまのこも
かきとあり、一時半の負車は湯幸の
着きぬ、朝日務は後ききして湯を
の煙ふ架せらも前の位道ふは、どか
まきぬの架せらも、見るまきし
道をたたりて、黄昏、善木、金、
いど流、たいて、夕けき、は、顔ふる、
い、おじみの湯、ふ、一、浴、して、東、都、あ
の汗を洗ひぬ、下婢、え、は、る、ま、を、し

と見慣れぬものみ、
群々をふも、磨き、て、晩、食、を、終、り、
獨り、孤、燈、を、對、して、旅、路、の、長、き、を、忍、ぶ、
御、衣、の、用、け、ち、有、り、の、た、さ、お、は、お、
ら、あ、こ、り、ふ、も、電、燈、の、光、輝、赫、々、
り、隣、房、を、聴、く、ま、あ、り、ま、る、の、
き、り、も、し、獨、り、寂、珠、を、用、ひ、て、旅、
の、後、然、を、あ、さ、さ、む、於、是、時、邊、就、寤、
雨、声、溪、籟、と、和、り、て、眠、を、あ、り、
し、

二月十六日

雨はあつちやうとちやうと密雲空の
包めは此日は空山は出来じと思ふ
瑞書二通を讀み東都并承山嶺
友の字を送り寂琴を繕ひて讀
多隣房三弦大鼓の音舞小舞
ば旅者を世でいさめし
天候少く之をじ密雲散じ日光を
見る即ち登山の準備をよし午

懐古時前塔澤を出下
山を登るに早し
半七駕支り
湯中小憩小篠茅原名を花む
百府中七眼界
凡免眼下
小元衣根
草鞋の紐
之の已志友也

始めて我々の世にあらはれし
夜は西宮の世にあらはれし
人の身の上の世にあらはれし
生の妙味は位々

旅窓雨を聞かす

旅窓雨を聞かす
旅窓雨を聞かす

月よ

雨風吹た志之。曉曇々来たきぬら
の夜耳ははまむら千騎万軍の

寄せ来きつゆし。ふるはをまを真ふ
若の波はあはは。池。尊如深が折江の
漸きふ寂せしむをもも出でて友と
えきを流ら。世声子むの起。まふま
あてさらし。世の。之も身あは
手あすを見せば

こまのまつりも終えこれば
えきよんかえふへこし
草やまをば手子持去て
裏の森邊の流しけり。

あらしの夢も出でぬれば、
 夢まはりのすゝたは、
 流せし杖の小車さく、
 かへりてまとの磯かさく、
 又鳴りの作もや、
 志のこや、
 草臥し露も多き身、
 あこれに物もなほ、
 恋まはるるは、
 くらぶげきも知らざりし、

杜月の子又吟あり曰く、
 真安まの、
 朝食恒秋骨子は、
 孝とてまの字とは、
 夢をり、
 ぞうりの宗、
 人ありて、
 かしあがりず、

ゆざらしの昔ふくまひの

草の湖

人共の悲恋を

を声え

世の中になくを悲恋の世は

おのれをなむあはれ

とて

ふくまひの

あはれを

あはれ

あはれ

丸きあはれを

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

世の
塔の邊の事な思ふ
花のまきし秋風ある世の心

世の
三人共下出す塔の邊の夜金
露木たるか宿る古藤庵は
葉小入りむとて夕映小出
雲等三まきと送

山頭か松の松ある之風寒と云
秋風孤松小鳴つ腸寒き
月元

別れの古
孤蝶

孤燈生題
秋を守つて居る言は
たごの次女

旅情

秋蝶

紙燈風小またこりて

瑛声賜小御言之寂寝果

孤蝶

志息小御言之寂寝果

三千男

至別九时棲月代也別也

是時二千五分湯中九世で二时前
入京本所十五古藤庵十
茶庵は道ち小程子十向つて
去り也

二十一日

樓月見迎心ぶぬ且日又

横濱喜知也九尋報也也

出之泉以美畢氏之妻

を雁問し午後九时過年天

務除旅屋上の屋小宿る

空想百出物字小集まり来りて

意小入ら小展轉反側一処を過

志息
猫こゝれ小夢破ら多旅の宿

八月廿九日

午前六時五分 横濱 停車 力が来り
電車 道は例のものより道の直を
午前八時 国府津 下車 全所
は例の鉄道 電車 止し 塔澤 下車
秋月 立ち初めし頃 赤毛を や 明を敷
まのり
午後二時の頃 ぼこ出さる 籠の前
北き玉 其 康 白糸の二 隈を 見る
飛沫 狂 雲 霧 と ぶりて 衣襟 を 打

清風 肌を洗ひて 志をい 古外
少き 田 あり 去つて 早 赤毛 ます
り 七條 氏 の 跡 を 吊 入 は 成 百 年 昔
蒼 あり 之 猿 心 ぞ 英雄 の 木 葉 を
埋むる 不 似たり 志をい 墓前 赤
毛 ます

古之つちの 志をい 猿 べる

白雲 霞 は 志をい ち ぬ け の 毛

赤毛 ます

げ。彼伊勢新加那。叙。杖。き。と。景。
 零。幾。轉。家。不。豆。相。を。累。し。て。よ。
 九。氏。獨。氏。衆。相。次。り。て。さ。百。州。の。草。木。
 尽。之。其。の。旗。手。も。び。く。黃。八。幡。の。
 さ。し。物。の。向。は。所。は。鬼。神。道。を。は。
 讓。り。け。む。五。代。の。祭。奉。事。に。む。ふ。
 し。之。有。へ。て。金。湯。山。下。數。甚。ま。
 碑。の。み。も。彼。の。北。條。氏。の。の。こ。み。す。
 ける。流。り。の。其。の。古。情。は。お。昔。は。こ。も。
 悲哀。の。感。心。を。寄。せ。ど。ら。む。や。彼。

のグレイの

*The birth of glory
 leads lead to the power*

と。吟。也。を。疑。ふ。あ。ら。む。ま。き。り。て。金。
 湯。山。下。の。草。木。を。盡。す。其。の。旗。手。も。び。く。黄。
 八。幡。の。向。は。所。は。鬼。神。道。を。は。讓。り。け。む。
 の。北。條。氏。の。衆。相。次。り。て。さ。百。州。の。草。木。
 盡。之。其。の。旗。手。も。び。く。黃。八。幡。の。向。は。所。
 是。は。鬼。神。道。を。は。讓。り。け。む。五。代。の。祭。奉。
 事。に。む。ふ。し。之。有。へ。て。金。湯。山。下。數。甚。ま。
 碑。の。み。も。彼。の。北。條。氏。の。の。こ。み。す。ける。

実多人は

The Power of forgetfulness

とちり終りむのり
あせを見よ夏靴を吹く

秋風は

野分とちりて未遂

木萩が原にあま

まのさくらむ

夜小入りとは組の子信を戯曲教

を吟す山を出て山に下るを云けむ

木常路の風光の夜月東山の青

葉を扇きて清流花の心志旅全書

浮き出て月田之山百回と風情

を眺め一人月やあらぬ詠せし

の昔をあまき

直多きは言宵の月を

いのよ見よ

三千日

あきを見よ、夏花を吹く秋風は
未逐小野分、まき七、荒きも、
木萩さく尾花まじりの廣原小
白露を打散ゆる音すまじし

鳴之蟬の声いと哀し
秋の宿

誰が園小舎は嘆くらむ

紅のそと

あきのもしおのらへて紫葉あらは
下座今あのをぞらせあるもの
非鹿の籠の籠う似たる女
あの手小やさしく赤む後つ手
も志やも志思ふ、ひまは、
あゝ家あぶら菜ふち
あぢろの夢、知小消へやらぬ

人の次めか思ひの~~ま~~ 似た人の影が
浪立つる胸のみくまきせん

女も世もあや

吊北條早雲

草も木もよびけ志君の所吊人は
片山影のな久つきふ露を命の
きりもきりす吹久秋風を恨みや
声も哀しあまのこゝろあり
嗚呼

泡沫が夢の如く業もむかし之

消へて頼鬼田系々

無常迅速美研骨を枯

つる青きなり

南无阿弥陀佛

南无阿彌陀佛

日は空ちて声もあふし

秋の蟬

心こころおき身みもきこころ秋あきの風

秋の風

自註 心こころおきの字あきよくと味あじふ可べし

おのぶらおのぶらは次女つぎむすめのびけし

女郎むすめさむ。

秋は散ちりこもるあきふるあき降ふりさむあき女郎むすめさむ。

百ひゃく花はなのまましてあき夏なつの野のささの

はののの

女むすめぢぢらのあき父母ちちおとこららむむ

夏なつささののささ

後のちのあき身みはあき松まつ野のはは

生なまきなま来きしあき秋あき野ののの露つゆホ

ねねををややふふららむむ

人は皆死ある最期の思ひあて
 蛇とより寝ころはりて後の世に
 財やをいままゝあつても
 只一念のちかぢり
 ぞらば得もあな代・待びね
 のらばいりし世もまよふあはれ
 身は思ひ可成の首の原
 月黒の雨寒き夜みまき
 来りし音も得かたし

身を焦すらむ

九月十日 梅偏御の侍を讀む

春の日に何故故里を捨てし
 問を待たせし

| | |
|--------|-------|
| いぞむの住家 | 逐まらる |
| 人は心の敵 | 残るけむ |
| 志むしは世の | ナニまへば |
| あざむし時の | のちみちる |
| 目に入る景小 | 浮び来り |

行末のみにて恨みある

さきとはいふこと

里遠し

はまきし國は

迷ひては

真多き身おのる

悲しみの

重荷よいつら

身も慣まし

さきとはいふ

あらねども

せはしき日よ

慰めらま

むらしのあまを

思ひても

たぐたぐいませ

もらさのみ

姫君は

おもしろい

今身の上よ

姫君よ

い

思ひ知る

えが女の

やさしき

用見まじ

いとくも

君が傍は

あるあつ

過かし夢の

思えま

胸は焚之火の

消る時よ

い

玉の君すまひ

道まよは

深の霞と

のさかたけ

野をまき音と

たかたけのたけ

衣楽園を

果る前

東門はむと

思ふ

慧心

たかたけ

かきまかかふし

九月八日 樓月子室可吟

金殿に咲ける梅がさきあきこの。

玉樓小句ふ牡丹が花あるの。

夏草の茂きさのあつふ。

白百合の一輪さける。

其姿 まよとの花の。

凡情のち貴き玉は。

海京の 千流の底に。

あまのし

英雄は浮世不迷ふ狂犬也。

事世末とは子供がまゐる。

世の中のまことの人は、

名も知れぬ賊の伏屋の

うちありこそ英雄や

立派傑や 事業やめ業

天地の まことの心

知事を得む

蝶と多し野末のたはあま

吾は又は世のまこと地所見む

Handwritten text in a different script, possibly a mix of Latin and another language.

Handwritten text in a different script.

As per Tholth apulchral stone

Some name arrests the passer-by.

Spur when Thou viewst this page alone

May mine attract Thy pensive eyes

And when by Thee That name is read,

Perchance in some succeeding year,

Reflect on me as on the dead,

粹骨一枚起法

寂々たる一片の粹骨もしんれ
これを抱いて撥をあらわすなり
のてし程をみえせしめよみえ
定むる角綴のたのむる
ご

粹の

結ぶもの

心ばい

推

ロオス・エント・ジュリエット

讀みて

誰やらの次ふ

似たり
枯柳

タツソフは眞を
舞ひサテ

光なき獄に朽る身を悔めじ
犯人と争むる運を恨めまじ
言まじき君を思ひてこのまが
身を苦しむるを悔め
今あふ君を心小忍ぶ時
身は空蟬ののら衣人をも
之心も我も消へぬ

よしさらば地は我を天は我をば
こころしむ

我骨は空の下の群をとも
城は流方歌舞はすこも
美しき君を海はのこも
我魂の哀を誰か時あかじ
遠けとも字在て人の魂
を引放つ其の方さ
君と我名をば隔て
時や待たふむ

於丹下

雁の声を聞きて

秋来ぬる空を絶ひ行く

あきふては、ちかの声も

たぎるまじりて

我ぬる来しきの人の

夢のふりて

我悲しき身を信じて

朝我

秋風も哀を歌ふまじりて

夜を込めて、志のあふ降る雨の音

鐘声枕頭をひびいて孤雁を

呼ぶとき、半次無事をあら

驚くは、孤雁も鳥も袖の露

涙かこする我姿をておげえ。

げに我は思ふるものよ。

あ、我は送へ方ものあるよ。

いましむは父母あきこの

汝の祖国をテいのふ、
家にはむそちか降る父母の、
世に出づるいましを待たざや
外は哀まきまらる國民のいましが
務を要せめずや、
たろを何ぞぞ

いましの肉いましをばのすこの
いましの魂いましを迷をすの
或時は定まき、最を追ひ
或時はあら悲みをせし

るがく

笑うと思はば、この泣き沈み、
沈むるも見まば、この打笑ふ、
筆取りて物書くも夢夕の、
ふ多取りて讀も見、
まぼろ志の

あ、我々の怪志き迄の物狂ひ、

愚を、其は只、定まらる子さ、
接ふ笑の幻景、

破き女の送相心

其は只英雄をのみ求むるを
さらば我は只空をのみ求む

思ふが我魂今もあほ

破り捨つべき如くあふ
こじりて

はのあき自果敢ふすあるあ

者まよ、迷想、我は今

と尖破よりむ

いまは、いまは、空なき美人の影

西女也す

さらば、まぼろしののけおさらばよ

××××××××××××××××××

はのあき、我雲よ、のよわき

あとし女ののけをいましめ外

をらけはさる

のそあほ、女のまぼろしを

蹴て得ずや

十六日

朝築地の洋人の許にあり、歸るをばりて主
を凌ぎ凌ぐ。夜は松永氏を叩いて雨
窓の下に春信を聞え。

朝は雨の音ありし。空いとくらけきば
床を出るまゝいと晩のうき、其上のまは
ふ土お前より四時迄かりや。王を積
み終り忠にこそ愛を立えし仇を作り、孝
情敢果すと流る。端胸の悲痛か糸

を破りし狂王の上、青花皇女雨を敷て
と涙おかせする皇女が終り、哀きま
り。哀きまより、人出は涙ふのらむ也。
り。ガニゴキトリの悪情又憐む可き者あり
カラス、ケントの老翁、フリにが至、誠頗ぶ
る嘆かまふ能あり。

All friends shall taste

The wages of their virtue & all free

The cups of suffering.

然るにエトモトのキハ倒れし一がむし又

其の婦の毒するたところ。彼ら女も亦自ら殺
し終。然るに花顔色あせて空をへて唐雲
歸するユルデヤの上は如何か。彼のケ下を

あゝ *of fortune hang of her
like sword & katana,*

One of them we behold.
叫ぶあめし。狂王の上は如何か。嗚呼
蘇野の橋も其の風の拂ふまを免
まらず。またとふくし。の悲劇なるもの女
間のありとやえはむ。の玉不共の碎

けしも。王は王を失せず。石又其の竹を
換へざる可し。西上人歌にて曰く

直後手は不は *（？）* 筆のしと
吾の合の教すはを惜むありけり

あゝ我少しと造化の妙。撮の一端を現
得たり。夜は松永氏を打き。西土を白く逢
ふ。由熊氏を古橋へ。吹抜を下りけり。花睡
一衣の淨瑠璃を酒と。美奈子の玉三。樹合の
宿屋。浪花の鳴子。花睡のお柳。まきき
於の雨晴る

朝は辛地ありし。一時頃銀のかりき金を取
出す。南西鉄道會社の五株の持主とある他
名前をこの二午はカーライルのゲーターを
讀む。ワロトラス、エルはゲーターの不健
全相の社生ふのり。ワイルム、マイスターは其の
建をふるもの代表ありとぞし。松小みり
神月みれき、エルエルがむつらぬを買ふ。
於九日晴
廿日朝は辛地ありき。川谷みれきふ子
原を指して丸をゆれき。ワイルム、マイスター

及びし。一信を買ふ。其の書を食し
き。附の歸をき。ニ竹福を教習せり
き。ととん夫人の通余をき。ぬふり
由熊をき。沈む。其の書を食し。最初
陣をき。沈む。其の書を食し。越子の崖
は先づ。然し。痛く。ふと。あつた。よ
熊梅の。は先づ。賞ある。此は。き
鶴梅の。先陣。は。先づ。先づ。先づ
切の。朝顔。は。先づ。先づ。先づ
中。方。の。寺。の。境。は。先づ。先づ。先づ

今かしあらう情しや、於時及歸宅寄序
少中村茂盛のうまひなま

二十の晴、紀の雨

其の朝、時、順中村を討む午時、時、迄
旗が舞、家、は、直、京、耽、を、女、を、後、く、
へ、て、ま、あ、で、書、華、地、を、向、ふ、途、丸、を、を、打、き、
引、大、三、の、第、三、卷、を、押、す、る、を、依、頼、す、之、川
氏、を、訪、系、不、在、あり、近、傍、を、漫、歩、す、
時、の、後、雨、二、訪、系、よ、う、や、と、氏、野、を、
在、り、即、ち、促、し、三、を、其、不、空、相、か、れ、と

之を、少、清、一、座、の、津、留、蹟、を、田、る、じ、を、あ、り、
余、事、の、し、し、時、は、後、三、の、三、時、の、さ、あ、り、を、後、
に、た、ら、し、く、輕、浮、調、圓、甚、ハ、ギ、リ、キ、次、は、が、改、
會、法、下、の、善、し、ま、ま、り、し、ま、し、次、は、京、班、の、書、
姫、雪、ま、又、中、の、骨、を、打、ち、ら、る、も、こ、ろ、ふ、切、て、は、井、
本、の、ま、月、の、押、法、様、橋、松、河、邊、屋、床、後、演、者、は、
手、遠、二、於、八、位、の、音、を、目、み、り、入、り、カ、ケ、て、け、き、と、
空、之、端、然、心、なり、身、幹、の、割、ん、は、其、身、
の、太、き、る、の、し、符、を、振、ら、ず、志、也、と、
の、端、め、て、流、り、あ、づ、る、と、よ、ろ、婦、人、は、希、き、る

落ち着きあり。満身うらまき。弁夜をがれ子
を切つて。紅涙をちぢる。鳴く蝉。怪トふど
秋。腸の思ありき。詮。親。真。執。手。ふ。ま。を。や
聴者。胸。小。あ。も。る。此。屢。あ。も。る。余。の。れ
きは。度。で。眼鏡。の。曇。る。を。拭。いた。い。を。こ。の。し
鬼。の。角。近。米。の。音。物。あ。り。と。思。ふ。そ。も。怪。し
の。こ。は。名。曲。あ。り。人。泣。き。の。え。ま。を。流。む。を
泣。の。と。ら。む。や。然。の。い。猶。之。を。忘。れ。し。て
は。た。程。ふ。も。あ。ら。ず。吾。之。ま。を。怪。し。む。る。の
之。し。う。り。き。我。を。未。だ。秋。の。小。清。の。ぬ。え。秋

の曲の悲調を流し、^{かき}抑りて。作曲
者。下。下。を。つ。て。秋。の。女。子。對。して。一。片。の。附。辭
ある。所。も。や。鐘。を。な。る。を。き。氏。の。あ。ら。は
無。き。事。を。流。し。と。思。ふ。と。歸。途。に。差。る。愛
を。乞。ひ。し。土。師。の。歸。途。
三。十。日。晴
冬。の。乾。地。面。を。流。し。み。を。流。し。て。入。る。を。流。し。し
か。公。羽。是。作。を。ば。其。年。の。つ。ら。さ。の。り。信。眼
を。流。し。し。と。思。ふ。と。り。し。

三十一 晴

秋月ニまじりていそなをいそいでゆく。二年と聞か
るは鶴降の島ニて懸く。小舟の「五重子」
ニてくは宮をいそいで来る。小舟の「御所」
の三浦別と申す。天淵真由内。京師の「三十三
小舟の国崎」等々を聞か
清む。此の書は、らまの真友はらむ。おせを
カールルのゴエラのへし。いそいでゆく。

土

秋月にはるをいそいでゆく。

秋月ニまじりていそなをいそいでゆく。

秋月ニまじりていそなをいそいでゆく。

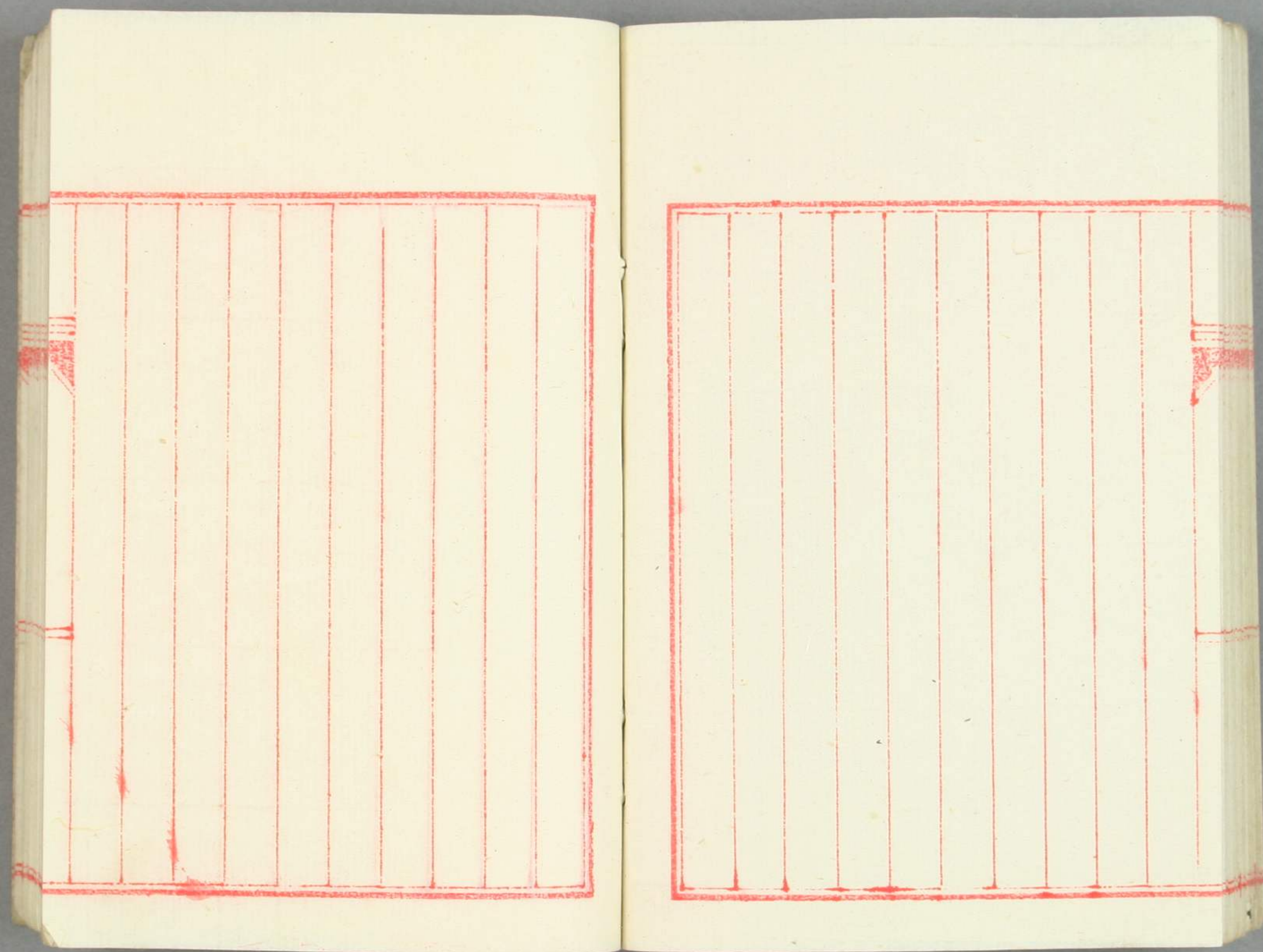
秋月ニまじりていそなをいそいでゆく。

秋月ニまじりていそなをいそいでゆく。

秋月ニまじりていそなをいそいでゆく。

秋月ニまじりていそなをいそいでゆく。

目下止已支由



以下全て

白紙

周王

治

北平

孤蝶庵筆雪。